

主 要 記 事

本学創立100周年記念行事	
名誉教授を囲んで座談会(その4)	1
各国文学シリーズ No.10	
中国の文学潮流	5
昭和50年度	
各研究助成金について	6
人事異動	8

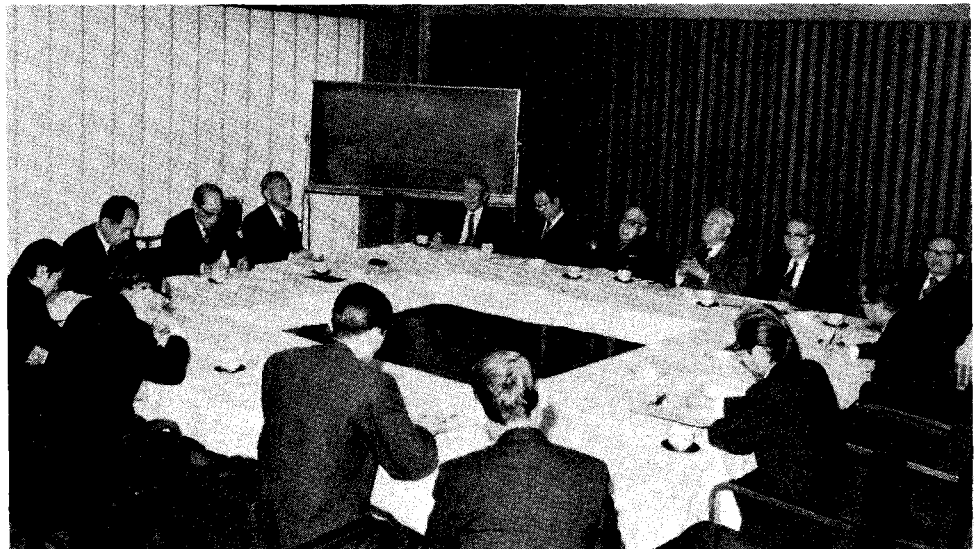
本学の歩んだ途

本学創立100周年記念行事

名誉教授を囲んで座談会 (その4)

出 席 者

名誉教授 内田 俊一
名誉教授 佐々木重雄
名誉教授 森田 清
名誉教授 宮城 音弥
名誉教授 小林 英夫
名誉教授 大石 二郎
名誉教授 杉野喜一郎
名誉教授 山内 俊吉
学 長 川上 正光
(百年史編集委員会委員)
○教 授 小林 靖雄
教 授 粟野 満
教 授 岸 源也
教 授 関根 太郎
教 授 田中 良平
教 授 室田 忠雄
蔵前工業会事務局長
遠藤 疆
経理部長 木下 四郎
庶務課長 斉藤正太郎



事務局長 斉藤寛治郎
庶務部長 大谷内 享
(○印は委員長)
昭和50年 5月12日開催

川上 先生方、お忙しいところお集まり下さいまして大変有り難うございます。今日は二回目の座談会です。あまり肩苦しくなく、こんなこともあったというエピソードを思い出していただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

小林 本日の主題は昭和20年以降のことです。目下のところ見当たらない戦争中の記録が非常に多いようです。昭和10年代の話題で前回お伺いすることの出来なかったことを先ずお伺いして、続いて本日のメイン・テーマ20年代の大学刷新に入りたいと思います。

先ず、昭和18年2月に窯業研究所が創設されましたが、設置の事情について、山内先生にお伺い出来れば……。

山内 大略を申しますと、丁度戦争が始まり窯業関係製品が種々な方面に進出しましたが、試行錯誤の研究が多いということで、昔から窯業関係の中心であった本学に窯業研究所の創設を考えてみたらどうかという話が出たのは、昭和16年秋だったと思います。当時、近



藤清治先生が亡くなられました後に、平野耕輔先生がおみえになって、田端耕造教授と私と3人でその話をしたのが発端でした。中村学長は「やはり窯業界の種々な方面のご意向をくむ必要がある。」ということで、森村市左衛門さん、大倉和親さん、大野政吉さん、浅野総一郎さん、黒田泰造さん、それから西村直さん、倉田倡孝さん、大友幸助さんその他10人位お集まりいただき、学長もお出でいただきまして、そこでこの話をいたしました。非常に良いことだから応援しようということになりました。一方、窯業協会の会長の金子堅太郎伯爵から当時の文部大臣に研究所の必要性を説いた陳情書を出してもらう一方

大学では、昭和17年、設立理由書を添えて文部省に申請しました。設立費用として70万円、運営費として30万円、合計100万円を要求しました。研究所を創ることは出来ましたが、6万円の予算しかついてこなかったのです。そこで、種々後援会をつくっていただき、お金を集めました。後援会は学長が会長になりました。50万円集めて、30万円を建物に、20万円を設備に使うことになり、建物は木造の建物を建てるつもりでございました。しかし、木材の配分を削られ苦労しました。当時、戦時中でしたので大塚さんと2人で、軍関係ではこんな窯業製品があると説明したところ、早速、木材がもらえ二階建、400坪の建物を建てられるようになりました。しかし、木造建築は防空上よくないということで、建物のないままにスタートしました。当初は窯業の工場の向うに昭和15年に出来た臨時工業技術員養成所の建物を利用し、更に窯業学科の方を共同で使うという恰好でした。

小林 森田先生、昭和19年1月6日に電子工学研究所というのが設置されましたが、これは後に電気科学研究所になり、精密工学研究所と一緒になったわけですが、この電子工学研究所の設置の経緯につき、お話しいただけますでしょうか。

森田 話の発端は昭和18年秋、横河電機の社長の横河さんから大学へということで、40万円ほど寄附していただき、それを基金にして設置しました。初代は山本勇先生が所長となりました。500坪ぐらいの建物ということで設計図をつくりましたが、戦争で建たなかったのです。材木を手当し、今の研究所地帯へ行く地下道の脇に積んでありました。終戦後も大工がいなくて、ずいぶん長い間、木を寝かせてありましたので、木が腐りはじめました。とにかく24~5坪の建物を建てました。これが電気音響機器を研究するための無反響室となりました。

その後、研究所の数を少なくしようという動きが生まれ、精密機械研究所と一緒にしたらどうかという話が出ました。機械と電気が一緒になるということで、色々な問題がありました。研究になにか支障があっては困るということで、精密工学という名前はどうかということでした。しかし、一方では、工学は皆精密だから精密工学なんて変じゃないかという話もできましたけれども、最終的には精密工学研究所になりました。おかげで電気の方からも若手が参りまして、今日に至りました。

小林 無反響室はどこにつくられたのですか。

森田 今の本館の裏の工場地帯の電気科の実験室のちょっと先です。

小林 それでは、佐々木先生に航空機工学科の設置についてお伺いしたいのです。

佐々木 昭和10年頃からアメリカでミッチェル少将が、「これからの国防は空軍の力に非常に負うであろう」と主張しまして、日本でも航空関係を振興しなければならぬという気運が出ました。その研究教育面でど

ういう対策を採るべきかという諮問委員会が航空研究所(東大)の亡くなった小川太一郎教授を中心に出来まして、私もこれに加わっておりました。大学に航空科を置き、高等工業に航空工業科を置くという答申がまとまり、緊急目標はどういうところに置くかが検討されました。当時すでに、プロペラ機の進歩の限界は先が見えているということでロケットのようなものの研究、開発に力を入れるという結論でした。このような事情から方々の大学に航空科が置かれました。本学では機械の浅川権八教授が原動機をやっておられましたし、又、石井政吉教授も航空研究所の技師として航空発動機の研究を行っておられましたが、本学で立派な航空機工学科をつくるには、航空研究所の出来あがった人の力を借りる必要があるという意見が出ました。私は当時航空研究所の囑託でもあった関係で航空研究所の和田小六所長にお願いしました。この経緯は和田先生が亡くなって、翌年、「和田小六博士追憶のために」という小冊子を編んだとき「抜粋」に書かせていただきました。

さて、航空機工学科がスタートした時、専任として一番初めに来られたのは、和田先生の助手をしてお



た岡本哲史先生でした。

川上 佐々木先生、和田先生は東大の造船のご出身ですが航空研究所は、機械じゃなくて造船が主だったんですか。

佐々木 造船ですね。初代の所長の横田先生も造船の先生です。和田先生は造船を出られたのですが、出られてから航空機の方をやっておられたのです。イギリスへ留学されて、ジェットエンジンの勉強をされたのです。

小林 本学では戦後すぐに、大学刷新という言葉で表わされると思いますが、本学の教育研究の刷新をはかるということで、終戦直後の9月にもう新学制委員会、それから教学刷新委員会等が設けられて、10月5日には、学内措置教授会を教授助教授懇談会と改めました。すなわち従来の教授会は教授だけでしたが、助教授を加えて、大学刷新を討議するということになりました。

これが、昭和21年いっぱいぐらい続けられて、「東京工業大学刷新要綱」が出来ました。この事情については、谷口修先生が作られた「70周年を迎えて」に載っております。また、この大学刷新のいきさつについて、内田先生にお話しを、お伺いいたします。

内田 当時のことを十分に思い出せませんが、あの当時、かなり頻繁に刷新委員会が開かれました。

小林 刷新委員会は、最後までに、29回やったと、記録にあります。

内田 その時の幹事というのか、記録係をつとめられた稲村耕雄先生が丹念に議事録を作って下さいました。

刷新には、和田学長がかなりイニシアティブをとられ、在来の学科制度を廃止するということを教授会で宣言されたのです。それで皆、それに従って考えを展開せざるを得なくなって、それで刷新委員会の委員の人選が行なわれたと思います。ですから、かなり広範囲

の方々が、皆、非常に自由な立場でディスカスされまして、私の一生の中では非常に思い出深い事となりました。学科の壁は和田先生の御意見で撤廃はしたものの、全部が一つの物には、ならないんじゃないか、丁度、縦割りと横割りをうまくアジャストしたものにすると、大体4つぐらいになる。それで、これを「系」とよびました。ただその時、建築では他のところには無いアーティスティックないわゆるアーキテクト・センスのようなものが、要求されますが、これをどう組み入れるかということで、独立しておりました。そのうちに新しい学制が国としても出来ました。また、東大を始め、他大学でも同じような、刷新委員会的なものが出来、続いて、それぞれの案が出て来ました。続いて大学院が、どうするかということになり今までの大学で多かったいわゆる縦割りが問題となり大学院でこれを、いっしょにするとどうするか、ということで、ジグザグコースをとりながら今日に至りました。そういう意味において東京工大の結論は、ある程度他の大学からも、注目されていたのです。その後、1951年に、工学教育のミッションがアメリカからやってきました。当時まだ御健在だった和田先生が中心になって、このミッションと日本中を回られて、約1ヶ月以上かかって、報告をまとめ、文部省と占領軍に提出されました。その人々の考え方でも、本学の新しい刷新委員会の要綱に示されたものはうまくおさまるということで、和田先生はミッションに熱心に協力されたのです。私は、その直前からアメリカに行きまして、M.I.T.を中心にアメリカの諸大学を見て来ました。ボストンへ行った時に、今度の戦争の終りの頃にハーバードで「General Education of a Free Society」という赤本と称するものが出来て、それを買って読んだのです。本学の考え方もハーバード大学の考えたことと大体似た面が多くこれは要するに戦争をはさんでの世界の一つの考え方の動きなんだなという感じもしました。この本の中にホワイトヘッドのことがよく出てくるのです。彼はイギリスでロンドン大学の工学部関係の先生をされて、それから哲学の教授として、ハーバードに呼ばれて、沢山の著書を書いているのです。彼の著書中に「Aims of Education」という本があり、その内容に魅せられました。私はその後、彼の本を沢山買って読みました。考え方は、哲学から来ているという感じがしました。工業大学における刷新委員会の仕事というのは、その線に計らずも乗っていたんだという感じがしたわけです。あの当時、他大学では、そういう感じが未だ育たない時で、本学が一番早かったんです。一般教育(General Education)の方からも今から考えて見ますと、優秀な先生方が沢山この大学に来られて普通なら他の大学では、一般教育という一つの枠の中に入る先生が、他の先生方と同じような立場で同じようにやられるというやり方は、また非常に独特なものでした。理学、工学それから一般教育のディシプリンとお互いの接触というものを掘り下げて、従来の教育を考えなおした形でまとまりました。

小林 この刷新の1つの柱に人文社会科学系の強化ということがあったと思います。宮城先生にこの問題に対する議論がどのように展開されたかをお伺いしたいと思います。

宮城 昭和24年新制大学になった時から人文系が出来たのだと思います。私なども終戦になりましてから、全てが改革されるので、講義に来いということで、私と加茂儀一先生が講義に参りました。これは、昭和21年頃だったと思います。講義はしていたのですが、まだ人文系という形はなかったんです。どんな人たちが、どんな風にして、どんな動きをしたか、という、ダイナミック面が大変重要だったと思います。私の場合、終戦直後に講義に米たのが最初の段階でした。それから第2の段階は任官前ですけども、内田先生が委員長をしていらっしゃる刷新委員会の一員に加わりどういう人選をしようかというような話し合いを行なったことでした。そして第3番目は任官というふうになりましたのが、人文社会の方が正式に出発した新しい「学制」スタートの時でした。さて私たちも喜んでこれに入るようになりました理由の1つは、人選にあたっては、昔のような伝統的なやり方ではなくて、業績を中心にしたことです。本学では有能な人を日本全国から集めようと考えたのです。又、先ほど、学科制度の縦割り横割りということからはっきりした講座制が無かったということで、有能な人を採ることが出来ました。1例を上げますと、今文部大臣になりました永井道雄氏が参りました時も、彼は教育の専門家でもありますし、教育社会学をやっていたものですから、「教育」として推薦したのですが、後になって「社会学」で採ったわけです。それでこちらで社会学をやってもらったわけです。

小林 小林先生は、年代から申しますと、昭和21年にはお出になっていたのでしょうか。

小林(英) 宮城さんといっしょで、新制大学になった時です。内田先生と宮城先生のお話しで、表向きのことは尽きていると思います。私のプライベートな所を申し上げたいと思います。昭和23年の11月だと思います。初め稲村先生のお部屋でお話しして、2度目ぐらいに内田先生にお目にかかったと思います。それで殆んど毎週のように、委員会があって、語学の方の人選とどういう語学がいいか考えてくれということでした。2回目ぐらいで、稲村先生から、M.I.T.に倣った学制をつくりたいとのことで、M.I.T.についての大きな書類を渡され、これを見て欲しいといわれてびっくりしました。非常に勉強になりました。こういうやり方もあるのかと思うとともに大いに協力していきたいという気持ちを起しました。ところが、私は16年間も外地に居まして、日本の様子を殆んど知らず日本に友人も少なく人選に苦勞しました。自薦他薦もありましたけれども、なかなか思うような人が得られないというような事でした。とにかく新鮮な人を採りたいという気持ちでした。工業大学でそういう新制大学が出来る事を聞きつけた人々が私の所へ履歴書を送って来たりしま

して、その人々に会って協議の上何人かに来ていただくことになりましたが、この中で1人驚いたことには、伊藤整先生が入っていたことです。

伊藤整先生は当時すでに有名な方で文士としては希れにみる学殖のある方、ことにホーマーなどを読んでいる人は殆んど文士にはいないのです。それを実によく読んでおられました。「ユリシーズ」などを日本で非常に早く翻訳されたのです。学究であると同時に作家なので、非常にびっくりしました。

まだ旧制の時代でしたが、とにかく語学教育をやらなくちゃならないということで、任官をしない仮の先生方が、皆、授業をしたのです。なんとか形がついた時に、教授は私1人で後は、助教授、講師として13人の方が任命されたと思います。この時代の方で現在御在職中の先生は、ロシア語の佐々木先生、英語の安倍先生ぐらいじゃないでしょうか、最近おやめになられた東宮先生や竹沢先生はその頃の方々です。

小林 どうもありがとうございました。今のお話は、刷新の所から新制への準備段階、そして新制へ入るころのお話だと思います。大石先生は戦前から教官をやっておられたわけですが、大石先生、刷新時代のお話を何か。

大石 私は旧いことは旧いんで昭和4年東京工業大学が出来た時にここに参りましたが、昭和16年から昭和19年頃まで闘病生活を送った後、物理学教室の戦時疎開のお手伝いをしました。昭和20年、終戦を迎えてまもなく病気が再発し3年位休んだので肝腎な所に、殆んど何にも通じていないんです。一応家が近かったものですから、時々学校に来ておまして、戦後学科が廃止され物理学コースというのが出来ました。このコースに来た学生は7人か8人でした。講義は、今日でいえば普通の講義じゃなくていわゆるゼミというような形でした。物理学のコースの第1回の卒業生は、今日、企業などの一般専門家として成長しております。話は前後しますが、昭和4年に東京工業大学に来ました頃、木下正雄先生が教授としておられました。新しい大学創立にあたり、基礎教育を視するというので、数学では一橋大学から渡辺孫一郎先生、物理は木下正雄先生と僕、化学は高等工業時代から植村塚先生がおられましたが星野敏雄先生が来られました。物理の方だけで申しますと、東大の工学部で当初真島真市先生が応用物理学の講座をつくるのに非常に苦労なさったというわけですが、東工大としては、基礎教育を非常に重要視するという形で発足したのです。

特に私の師事しておりました木下先生はドイツに長くおられまして、先生のドイツ風の教育ものと感じました。そのうち工業大学の学生定員がどんどん増加を始め、物理系と化学系に分けて、講義するようになりました。戦後新制大学に移行する時、先ほど先生方がいわれた新制大学の基礎教育の重視ということがありましたが、これは、自然にそういう基礎教育に非常にエキスパートな人が全国の大学から講座のある無しにかかわらずおいでになりました。

運営上理学系の中に数学、物理学、化学、生物の4グループが出来ました。最初の系の委員は植村先生でした。私は植村先生の基礎教育をさらに充実していかなければならないんだということを機会あるごとに申し上げておりました。

小林 大学の歴史で一番動揺した時期の和田学長の思い出をお持ちだと思いますが何か……

内田 先生の意見は非常にはっきりしておられるのにびっくりしたことがたびたびでした。

宮城 それからテンボが速いんですね。非常に早かった。

杉野 非常に印象に残っているのが、終戦直後に和田先生は非常に感じるころがあったのだろうけれども一応辞めるといって辞表を出されたと思いますが、皆で新しく選んでということだったので、教授助教授懇談会で、投票が行なわれました。正確な所はわかりませんが、たしか54対37票で和田先生が選出されたのです。とにかく場合によっては和田先生は当選しなかったかもしれないのですからね。その点偉いと思いました。それからはっきりいうとワンマンでした。学科廃止の時、何んであったかわすれましたが、ほとんど最後のデシジョンの時、亡くなった山本勇先生の柔かい言葉だったのですが和田先生にかなり反対されたのです。そうしたら山本先生をしかりつけました。それが非常に印象的でした。学部運営ではあれほどフェアにやっておられたのに、研究所についてはそれほどではなかったように思えます。それは先生が東大の航究研究所におられたので、研究所については一家言を持っておられて、これは俺にまかせておけという気持ちがおありになったと私は思っております。

小林 系委員会の委員は研究所は全部を代表して1名でした。各研究所から代表が出たのではないですねこの構成などもよくわからないのですが。

山内 系・コースというのが出来ましたけれども、系というのは職員運営組織ですね。コースは学生の進学コースなのです。学生はどこにも所属していない、東京工大の卒業生ということだったのです。

内田 学校は入学試験の時成績だけで学生をとるでしょう。あとで希望でコースを決めようとするとかたよりが出来てしまうんです。

山内 私が学長のときに系をやめて学科になったんですが、コースの方は変化がなかったのです。職員組織だけを変えて行ったのです。学生は学科に所属していないという形でした。

斎藤 和田先生の全ぼうを見ていませんからわかりませんが、どなたかがおっしゃったように、エンジニアから出られた学長として、発想に少し特徴のある方でそれはおそらく生まれ育ちとかも関係あると思います。

和田先生の改革ですが、学科を一応廃止したことは斬新なことでした。あ、いうことを非常にスッキリやるということは非常に難しいことだと思うのです。ですから、その陰にはそのために苦労したということも

あるのです。あるコースに学生が集中することによるトラブルもありました。そういうことで非常に理想の高い計画ではあったんですけども、やはり短期間に完全に実行できるものではありませんでした。

工大では他大学とちがって総合的に話し合いでやって来た事は、その後の発展に非常にプラスになったと思います。私の方の心理学に例をとりましたが、たとえば、色彩では無機の稲村先生、また、音の方はだれ電気の方はと、内部の関係も深まりました。

そして今でも方々の会社に話しを頼まれたりして行きますと、その頃の卒業生に会います。その時、あの頃は良かったですね。工大で学んだことは、とても良かったと話しています。

小林 どうもありがとうございました。もう一回、昭和30年代のことにつきいろいろと名誉教授の先生方にお伺いしたいと思います。今日出ていただいた先生にも再度お願いするかと思いますので、その時はよろしく願いいたします。長時間ありがとうございました。

各国文学シリーズ(10)中国篇

中国の文学潮流

矢島 釣次



北京の四季はこの世の絶品である。緯度の高い関係で北京の春は遅くやってくる。一抱えもある柳樹からボタン雪のように柳の綿（中国では柳絮という）が降ってくる。花が一度に開き、人々は屋外生活を満喫する。朝早くから風流人が鳩に笛をつけて放す。ようやく東の空が明るくなるころ、天空に鳩笛の音が間遠にきこえてくる。

今は読売新聞で健等を振っている高木健夫氏が「高建子」というペンネームで「北京横丁」「北京百景」という書物を出版したので、この本を手引きにして私は暇があれば北京の巷をほつつき歩いたものである。

又、北京の秋も素晴らしいの一語に尽きる。抜けるような青さ、その中に北京にひそやかな息づきをしている。そんなある日、西单牌楼近くにある天安門通りに面した新々劇院で巴金の激流三部作「家」「春」「秋」の中の「家」の映画がかかっていた。主演女優は李麗華——彼女は現在日本にいたりか、香港にいたりといわれている——であった。映画の道具建ては当時の日本に比べても貧弱であったが、仲々よく原作の主旨を伝えてくれていた。

巴金という作家はロマン・ローランに私淑し、作風は明らかにロマン・ローラン型であった。中国の大家族制度の中で、古い世代と新しい世代が同居し、その中で若い世代が恋愛などでいろいろと今日考えれば全く不要な苦しみをしていく様が、実に見事に描き出されていた。若かった私は、中国の若者の苦しみに共感をおぼえて、経済学書など傍においたまま、一気に激流三部作を読み終えた、そのときの胸の高まりは今でも忘れ難い。

昭和17～8年ごろの北京のタクシーとは人力車（洋車）であった。毎日洋車にのつて北京の銀座通り王府井を通り抜けて北新橋に近い北京大学法学院に通勤し

ていた。洋車曳きとの話から彼らの生活に非常な興味を懷いた。そこには、社会の底辺で生活するものの悲しみとよろこびがあるように思われた。

こんな北京の洋車曳きの七転び八起きの末に、ついに立ち上がる気力も喪せて葬式の棒かきに転落していった物語、老舎の「駱駝祥子」の小説に触れることができた。この本の中には、庶民の笑いとペーススがあって忘れられない作品である。

もともとこれが老舎の作風であった。例の第1次大戦後の講和条約での列強、特に日本の強引な対中政策に反発して5・4運動が1919年5月4日に勃発し、この運動は中国全土にまたたく間に波及した。その発火点は北京大学であり、学生運動の形態から始まった。この5・4運動期における学生の動きを題材にしたのが老舎の「趙子曰」である。だが、日本の学園紛争を題材にした新左翼ばりだとか、肩を怒らせたような表現は一つもない。どちらかというと、石坂洋次郎調であり、藤沢恒夫調の明るさとペーススがあって、そんなことで私は老舎の小説が好きである。

中国の現代文学の出発点は、遠く民国の始めにさかのぼる。民国初期の思想界は、旧思想対新思想の激しい嵐の中にあった。アメリカ帰りの胡適、マルクス主義を掲げ、後に中国共産党の創立に参画する陳独秀、孔子屋打倒を呼ぶ呉虞などが雑誌「新青年」で活躍し中国近代化の思潮が高まってきた。

このときに、従来の文語体文学から口語文学、つまり、常時使う言葉で文学作品を始めて執筆したのが、有名な魯迅の「狂人日記」「阿Q正伝」などであった。特に狂人日記の最終箇所は旧文化に対する激しい挑戦状であろう。大人たちは喰人種である、それは旧文化で毒されているからだ。ただ子供だけは旧文化に毒されていない。だから子供を喰人種から救え！救え！と絶唱する。ここに魯迅の真面目がある。

演劇、劇曲の面でも、田漢、夏衍、などの優れた人材が輩出した。特に鬍鬚の代表作「雷雨」などは、アメリカのユージン・オニールばりの独白部分があって、登場人物の深層心理までが浮彫にされ、オニールの「奇妙な幕間狂言」と共に忘れ難い作品の一つである。

エッセイストの第一人者として魯迅の実弟周作人を推したい。「入厠読書」などは私の好きな小品である

が、北京の胡同の奥深くで自然の移ろいと事物の微妙な変化を、この人ほど楽しんだ。真の文人もなかったであろうと思われる。

舞台は一変した。中共が北京の主人となり文学が政治に奉仕させられることを余儀なくされた。もっとも、それ以前の日本との戦争で華やかな国防文学論議があったのではあるが、1942年5月、延安で毛沢東によって「文芸講話」が公表された。この講話の結論が「文芸は政治に従属する」というものであった。この講話の路線に沿って公開された代表作が趙樹理の「李家荘の変遷」女流文学者でスターリン文学賞を受賞した丁玲の「太陽は桑乾河を照す」の大作であった。

「李家荘の変遷」は、農民が立ち上って地主などをたたき、新しい村作りに成功し、労働英雄を賛える作品である。この頃から「文芸報」「中国文学」などの雑誌が発刊され、政治と文学をめぐる激しい論争が展開されるようになった。

特に、文芸報誌上では、胡風などが上流でもなければ下流でもない、いわゆる人民の大多数の中間人物をありのままに描こうとする30年代文芸思想と文芸講話に基づく文芸の「労・農・兵」方向とが激しく対立して胡風が批判され、胡適も批判され、それと共に中国の名作「紅樓夢」もブルジョワ的といって批判されるに至った。中でもスターリン文学賞を受賞した丁玲

のごときは、昨日まで大手を振って入っていった文芸者協会の掃除婦の地位にまで落されて筆を折らざるを得なくなった。

50年代から中国文学は政治に従属し奉仕するものとなった。そうすると、文学自体が「借古諷今」、つまり歴史の故実に拠って現在を皮肉するというパターンをとらざるを得なくなる。その代表作が呉晗の「海瑞罷官」であろう。これは明代の清廉潔白な官吏海瑞が皇帝穆宗に直言して受け入れられず免官となる筋の京劇であるが、これが59年の蘆山会議で首脳部に直言して免官された国防相彭德懷を風刺したものと指摘され、これが口火になって文化大革命の嵐が吹き荒れたことは余りにも有名である。

その他、毛沢東夫人江青による「京劇改革」をあげなければならない。たとえば、「紅燈記」「沙家浜」「海港」「奇襲白虎団」など、中国は正義なりのキャンペーンのような文芸作品でわれわれが考えている文学常識論から見れば文学とよべない。しかも文芸作品が上層部の権力闘争の道具に活用されているに及んではもはや語る言葉もない。かくて、文学者の殆んどが粛清され、郭沫若も自己批判し、中国文学界は不毛性をますます高めていくことになる。

(工学部一般教育等経済学教授)

昭和50年度 各研究助成金について

昭和50年度の各研究助成金の採択状況は、次の通りです。

(研究課題、研究者、研究費の順)

◎旭硝子工業技術奨励会助成金

溶液X線回折法による金属錯体溶液の構造化学的研究	工学部 教授	70万円 大滝 仁志
新しい高温用固体電解質に関する研究	工学部 教授	85万円 加藤 誠軌
グラスファイバーを補強材とする混合複合材料のプレ	工材研 助教授	60万円 小池 迪夫

ス成形に関する基礎的研究

イオン結晶および共有結合性化合物における分屈折と反磁性モル帯磁率との相関関係	工材研 助教授	75万円 中村 哲郎
--	---------	---------------

(以上継続 4件 290万円)

固体酸化物の化学溶解に関する研究	工学部 教授	80万円 春山 志郎
有機資源の循環利用に関する研究	資源研 教授	90万円 池田 朔次
超低温におけるガラスの材	工材研	65万円

料特性に関する研究 教授 龍谷 光三
希土類酸化物の焼結に関する研究 原子炉研 85万円
助教授 井関 孝善
(以上新規 4件 320万円)

ガラスの不均質の測定方法 工学部 300万円
および装置の開発 教授 境野 照雄

立体規則性重合の反応工学的研究、とくに無溶媒気相重合方式の最適反応操作の検討 工学部 250万円
教授 慶伊 富長
(以上特別 2件 550万円)

◎河上記念財団工学研究助成金

新しい溶融塩電解法による希土類金属を含む2元素状態図の作成 工材研 30万円
助手 守都宮泰造

高感度水蒸気センサによる固相反応の研究 工学部 50万円
助手 水谷 惟恭
(以上継続 2件 80万円)

イットリア(Y_2O_3)含有超硬ガラスの開発 工学部 57.4万円
助手 牧島 亮男
光化学大気汚染におけるアルキシル遊離基の研究 理学部 50万円
助手 神宮寺 守

(以上新規 2件 107.4万円)

◎小川育英研究助成金

(研究助成旅費) 工学部 50万円
「第5回欧州地震土層会議」 助手 小野 徹郎
(イスタンブール)出席のため

(以上1件 50万円)

◎吉田科学技術財団研究助成金

(短期旅費)

IFAC国際会議出席のため 工学部 39万円
教授 寺野 寿郎

米国「ゴードン研究会議」出席のため、及びイタリー「第7回有機金属化学国際会議」出席のため 工学部 25万円
助教授 山本 経二

アメリカ合衆国建国200年 工学部 40万円

記念アメリカ化学会年次大会への派遣 助教授 山崎 升

英国ロンドン大学、クイーンメリーカレッジへの留学 工学部 50万円
助手 菅野 道夫
(以上4件154万円)

総計 1551.4万円

昭和51年度工学部附属工業高等学校

入学試験の概要について

昭和51年度工学部附属工業高等学校入学試験の概要は、下記の通りである。

1. 入学願書受付
1月10日(土)～1月16日(金)
2. 入学志願者数
機械科 148名 電気科 125名
電子科 249名 工業化学科 108名
建築科 230名 計 860名
3. 入学試験
1月27日(火) 数学、英語、国語
4. 合格者数
機械科 48名 電気科 44名
電子科 50名 工業化学科 46名
建築科 52名 計 240名

? 最近の物価の値上りは、われわれの教育研究活動にも大きな影響をあたえています。さて今回は 1. 最近本学で支出されている総経費はどの位でしょうか。
2. これを人件費、物件費、施設整備費に分けるとそれぞれの内訳の割合はどうなっているのでしょうか。 ?

教官寄贈図書紹介(その9)

〔寄贈者名〕

力武常次(教授): Earthquake Prediction

山田圭一(教授): 科学のライフサイクル

山崎俊雄(教授): 近世技術の集大成、技術者・発明家レオナルド・ダ・ヴィンチ、人間—科学—技術(上), 同(下), 現代科学技術革命論, 現代自然科学入門

古川静二郎(教授): Ion Implementation in Semiconductors

浜野健也(教授):セラミックスの基礎,セラミックス化学,偏光顕微鏡の使い方
齊藤進六(教授):セラミックデータブック '73, 同 '74, 同 '75,
宗宮重行(教授):厚陶管の現状と将来

以上の図書が図書館に寄贈された。

◇謹告

元本学々長,八木秀次氏は,去る1月19日(月)心不全のため,慶応大学付属病院において,逝去されました。ここに深く哀悼の意を表します。

なお,同氏は,昭和17年3月より,昭和19年11月まで,本学学長として,在任されていました。

? 本年度の決算額が未済なので昨年度の決算額を挙げてみます。

1. 総額 約91億5,600万円(昭和45年度には44億6,000万円)
2. 人件費 52.4%, 物件費 30.7%, 施設整備費 16.9% となっています。 ?

学部入学試験願書の締切

学部入学志願者の願書の受付は2月2日午前8時から開始され,同10日午後5時に締切られた。

募集予定人員774名に対し,4,165名の応募があった。応募者の第1志望の類は,1類943名,2類207名,3類387名,4類894名,5類970名,6類764名の内訳となっている。

なお昨年度は応募者総数4,711名,入学試験合格者数795名であった

編集後記

期末試験,修士論文発表会,卒業研究発表会,そしてまた入学試験と,せわしない毎日の続く頃となりました。

一年の総決算の月に現在の工大へと大躍進をした頃の歴史をふりかえり,新しい年度へのファイトを燃していただきたいと,“本学の歩んだ途”を掲載いたしました。

東京工大クロニクル No.78

昭和51年2月28日

東京工業大学広報委員会 発行

東京都目黒区大岡山2-12-1

Tel. (726) 1111 内線 2032